

さまになりて、蛛の巢をはらひ、あるは忍草のつり繩になはれ、あるは石菖の根をかくまれ、果は
何やらの薬とて、食物醫者にむしられて、藥鐘の中のうき目を見る、彼は一類もおほかる中に、竹
箒と聞えたるは、心とければ命みじかく、おほくは市中にありながら、木の葉吹ちる秋のゆふべ
は、隱逸の心も忘れずとや、扱こそおほうちの朝ぎよめにも、諸司百官にさき立しが、いつしか御
讓位の變にあひては、花もちりしく、院の御所に、伴のみやづこもよそしく、かくては宮づか
へもおかしからずと、塵の此世をいとふ心より、もろこしの芳野も遠からで、國清寺の會下に寒
山和尚をたのみて、明暮の洒掃におこたらねば、心のちりも拂ふばかり、竹のうきふしも聞ぬ身
となりて、むまにくるまのあとをだに見ず、まかるを豊干の四睡圖は、我もかたはらに寐ころび
て、其時の名をと、むべかりしに、繪師のあやまりて、五睡ならねばと、さしもなき事をいひつ
り、浮世の煤はきに立かへりて、芥川の名に流れけむ、さるは箒傳のみにあらず、人も榮落のかぎ
りあれば、一季二季の奉公人とて、かゝる身のほどをえれとなむ、

〔運歩色葉集〕多玉箒タマハケ正月融山ノ緒八廻命千秋万歳義也

〔倭訓栞前編十四〕多たまは、き 万葉集に、春正月三日召侍從堅子王臣等令待於内裏之東屋垣下、
則賜玉箒肆宴と書し、また玉箒かりこ鎌麻呂とも見えたれば、皮膚をいふなるべし、本草にも玉
箒玉帚の名あり、今いふものは、管根草の莖にてこしらへたる也略○中 南都東大寺正倉院に、子日

鋤及玉箒ありて、其圖をみれば、別にかはれる體也、是古へ帝王躬耕、后妃親蚕の遺意なるべし、

〔觀古雜帖初篇〕玉箒俗稱ニ及ベリ、八九月小白花開ク、或云、茶セン柴シ野ノ生シ宿ノ根ニ高ニ三尺、靡ノ狀長キハ四尺、
東大寺ノ寶藏ナル玉箒ハ、長二尺許、箒鬚ノ杪毎ニ紺色ノ細珠ヲ帽ラシメ、把ハ紫草ニテ包タル
上ヲ、金ノ糸ガネニ五色ノ細珠ヲ貫タルモテマキシメタルガ、年ヲヘテ糸カネノ絶レ損ネタリ
ト見ユルモノ二柄アリ、紺珠搖々トシテ塵ヲ驅ルノ具ニ非ズ、一時ノ儀箒ノミ、彼ノ萬葉集ナル